

「ぶどう黒とう病」の特徴と対策

平成 29 年 7 月 20 日

長野農業改良普及センター

7 月中旬頃から長野管内各地で「ぶどう黒とう病」の発生が報告されています。ほ場をよく観察して、被害を広げないように管理しましょう。

1 特徴

- ①結果母枝や卷ひげなどの病斑部組織内で菌糸の状態越冬する。
- ②病斑上に形成された分生子が雨滴によって広がり、植物体の各部位に感染する。胞子の発芽、侵入には数時間のぬれ状態が必要である。
- ③葉、新梢、卷ひげ、果実など、若い各部位で発病する（写真 1～3）。最初、黒褐色円形の小斑点を生じ、のちに拡大して中央部が灰白色、周辺部が鮮紅色から紫黒色の陥没した病斑になる。
- ④萌芽直前から梅雨明けまでの感染期に降雨が多いと多発し、特に 4～5 月の連続降雨は発病を著しく助長する。
- ⑤発病果粒は肥大が進むと裂果する恐れがある。裂果部では灰色かび病が発生しやすくなる。

2 対策

- ①被害果粒はできるだけ除去する。
- ②発病が多い年は速やかに袋かけを行う。その際、雨水が袋内に流れ込まないようにしっかりと袋かけを行う。
- ③防除後、できるだけ早く袋かけを行う。袋かけまでに期間が空く場合には、特別散布を行う。
- ④第一次伝染源である、罹病結果枝や卷ひげを除去する。特に卷ひげは、冬になると固くなり除去しにくくなるので、新梢管理に合わせて除去を徹底する。



写真1 果粒での病斑



写真2 葉では主脈や葉脈に沿って病斑がみられる。
次第に中心部に亀裂を生じて穴があく。



写真3 新梢での病斑